

# イエシュアの葬りと封印された墓

聖書箇所 マタイの福音書 27 章 54～66 節

## ベレーシート

●イエシュアが十字架につけられて死なれた前後の五つの奇蹟的な出来事は、後に起こる預言的な出来事を啓示していることを前回学びました。今回はそれらを見た「百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たち」がどのような反応をしたのか、そしてそれが示していることは何かを考えてみたいと思います。まずは今回のテキストの一部を見てみましょう。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 27 章 54～61 節

54 百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たちは、地震やいろいろな出来事を見て、非常に恐れて言った。

「この方は本当に神の子であった。」

55 また、そこには大勢の女たちがいて、遠くから見ていた。ガリラヤからイエスについて来て仕えていた人たちである。

56 その中にはマグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた。

57 夕方になり、アリマタヤ出身で金持ちの、ヨセフという名の人 came。彼自身もイエスの弟子になっていた。

58 この人がピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。そこでピラトは渡すように命じた。

59 ヨセフはからだを受け取ると、きれいな垂麻布に包み、

60 岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。そして墓の入り口に大きな石を転がしておいて、立ち去った。

61 マグダラのマリアともう一人のマリアはそこにいて、墓の方を向いて座っていた。

## 1. 「この方は本当に神の子であった」という告白

【新改訳 2017】 マタイの福音書 27 章 54 節

百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たちは、地震やいろいろな出来事を見て、非常に恐れて言った。

「この方は本当に神の子であった。」

●「百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たち」とは誰のことでしょうか。それはローマの兵士たちで、異邦人です。ユダヤ人たちよりも、異邦の方が先にイエシュアが神の子であったと告白したのです。これは、「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」(マタイ 19:30)、あるいは「後の者が先になり、先の者が後になります。」(同 20:16)とイエシュアが話したように、「先の者」とはユダヤ人たちのことであり、「後の者」とは異邦人のことを意味しています。つまり、ユダヤ人たちよりも、異邦人が先になるということです。「なる」とは、イエシュアを神の子として信じるようになるという事実です。このことは、ローマの百人隊長の信仰に対して、「わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません」(同 8:10)とイエシュアが称賛していることでも分かります。

## מתי

●「百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たち」の「この方は本当に神の子であった」という告白は、イエシュアの人性のうちにあった神性を認めたことを意味しています。イエシュアの十字架の死によって、神殿の垂れ幕が上から下に真っ二つに裂けたことをマタイは記しています(マタイ 27:51)。それは神と人を隔てている仕切りの幕が裂けただけでなく、神の民であるイスラエルと異邦人との間にある「敵意という隔ての壁」が、イエシュアの肉体によって打ち壊されたことをも意味しているのです(エペソ 2:14)。また「奴隷と自由人、男性と女性」といった隔ての壁も打ち破ってくださったのです(ガラテヤ 3:28)。このように、イエシュアの十字架の死に際して記されている一つひとつの記述には、神のご計画における重要な事柄が啓示されているということなのです。

## 2. 大勢の女性たち

【新改訳 2017】マタイの福音書 27 章 55～56 節

55 また、そこには大勢の女たちがいて、遠くから見ていた。ガリラヤからイエスについて来て仕えていた人たちである。

56 その中にはマグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた。

●イエシュアの周りには常に多くの群衆がいましたが、その群衆の中にはイエシュアに仕えていた大勢の女性たちがいました。56 節に「その中にはマグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた」とあります。「ヤコブとヨセフの母マリア」と「ゼベダイの子たちの母」は同義です。つまり、ここでは「マグダラのマリア」と「ゼベダイの子たちの母マリア」がいたことを記しています。イエシュアの母マリアとベタニアのマリアは記されていません。しかし、**ここで重要なのは、「マリア」という名前が持っている意味**なのです。

●キリスト教の歴史において女性の存在とその働きは重要でした。彼女たちはいつもイエシュアの傍らに存在していました。使徒の働き 1 章 15 節にはイエシュアの昇天した後の事が記されていますが、「百二十人ほどの人々が一つになって集まっていた」とあります。その中の人とは、11 名の使徒たち、その「彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一にして祈っていた」とあります。イエシュアの兄弟たちとは 4 名(ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン)です。使徒たちと合わせても、男だけで 15 名です。他の男性もいたとは思いますが、他に記されているのはイエシュアの母と女たちです。ということは、女性たちがいかに多かったかが分かります。当時のユダヤでは男性中心の社会であったため、女性は重要視されていませんでした。ところが、イエシュアは多くの女性たちから信奉されていたのです。

●女性たちの中でも、「マリアという名」は特別な意味があります。イエシュアの母の名がマリアだからではありません。マリアという名が啓示している事柄が重要なのです。ヘブル語では「マリア」のことを「ミルヤーム」(מִרְיָם)と表記します。これはモーセの姉である「ミリアム」と同じです。余談ですが、なぜ「ミルヤーム」(מִרְיָם)を「ミリアム」と表記するのでしょうか。それは英訳の弊害です。英語表記が Miriam としているからです。日本語訳は英語に追従してしまっているからです。しかしヘブル語では「ミルヤーム」なのです。また、【新改訳 2017】では、それまでの「マリヤ」を「マリア」に改訂しています。それはギリシア語表記である Μαρία を優先したからです。ユダヤ人の名前は固有名詞であるにもかかわらず、正しく表記されることなく、自由に訳出されている

## 2

のです。「イエシュア」を「イエス様」と訳している聖書もあるほどです。原初に帰ると意識で訳された聖書であってもこの有様ですから、その時点でその意識が削がれてしまいます。

### 3. イエシュアの葬り

【新改訳 2017】 マタイの福音書 27 章 57～61 節

57 夕方になり、アリマタヤ出身で金持ちの、ヨセフという名の人々が来た。彼自身もイエスの弟子になっていた。

58 この人がピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。そこでピラトは渡すように命じた。

59 ヨセフはからだを受け取ると、きれいな亜麻布に包み、

60 岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。そして墓の入り口に大きな石を転がしておいて、立ち去った。

61 マグダラのマリアともう一人のマリアはそこにいて、墓の方を向いて座っていた。

●ユダヤの律法によれば、十字架につけられた者は呪われた者とみなされ、その者によって地が汚れることがないように、「安息日」の前までに死人を十字架から引き降ろさなければなりません。そのとき、イエシュアのからだを引き降ろして墓に葬ろうとして下げ渡しを願った人物が突如現れたのです。その人物こそ、ここではじめて登場する「アリマタヤのヨセフ」です。もし彼が現れなかったとすれば、イエシュアは二人の囚人とともに、囚人用の墓地に埋められていたかもしれません。

●マタイの福音書ではイエシュアの受肉と誕生の時にイエシュアの父となるヨセフが登場します。そして、イエシュアが贖い(身代わりの死)を成し遂げられた後にも、イエシュアの遺体を引き取って自分のために備えてあった墓に葬ったアリマタヤのヨセフが登場します。つまり、**御子イエシュアの生涯の始まりと終わりに、「ヨセフ」という名前がかかっているのです。**これは単なる偶然ではありません。そこには隠された巧妙なつながりが意図されています。聖書をユダヤ的な視点(ヘブル的視点)から読むということは、こうしたことにも着目し、その意味するところを思い巡らすことでもあるのです。なぜなら、御子イエシュアはそれまでの旧約聖書の中に啓示されてきたことを満たす(実現する・成就する)ために神から遣わされているからです。つまり、イエシュアと旧約聖書とはきわめて密接なつながりをもっているからです。

#### (1) 「アリマタヤ」という地名

●イエシュアの遺体を十字架から引き降ろしを願い出た人物が「アリマタヤ」出身であったことは、深い意味があります。「アリマタヤ」とはギリシア語の「ハリマサイア」ἀριμαθαιαで、「高い所、山地」という意味のヘブル語の「ラーマータイム」に定冠詞のついた「ハーラーマータイム」אֲרִימָתַיִםをギリシア語に音訳したもので、預言者サムエルの故郷である「ラマタイム・ツォフィム」と同一視されています。通称「ラマ」とも呼ばれ、イスラエルには他の三つの地域にも「ラマ」と称するところがありますが、おそらくアリマタヤのヨセフは、預言者サムエルの生まれ故郷と同じ場所だと考えられます。

●アリマタヤ出身の預言者サムエルは、最後のイスラエルの士師として、王を求めるイスラエルに対してイスラ

## メ

エルにおける王制の理念を文書化した偉大な預言者です。やがて彼から油注がれたダビデが登場しますが、ダビデ以降、預言者サムエルの警告どおり( Iサム 8 章参照)、イスラエルの多くの王が牧者の心を失って行きます。その結果、イスラエル(北も南も)は亡国という憂き目に遭遇します。そうした中で預言者エゼキエルは真の牧者なるメシアを神がお遣わしになることを預言しました。エゼキエル書 34 章にあるように、羊を知り、羊を養い、敵から守り、憩わせ、そして羊のためにはいのちを捨てるという、そのような牧者こそイスラエルの真の理想的な王の姿です。それはダビデに勝る真の王、メシアなる王イエシュア・メシアを指し示しています。つまり、「アリマタヤ」という地名には、**真の王となるべきメシア・イエシュアがやがて来られるということが隠されている**と言えるのです。

### (2) アリマタヤのヨセフという人物

●アリマタヤのヨセフは、預言者サムエルと同じ出身地であり、サムエルが指示した「まことのイスラエルの王であり、かつ真の牧者であるメシア」を待ち望んでいた人のひとりでした。ルカは彼のことを老シメオンと同様、「**神の国を待ち望む人**」として紹介しています。彼らは預言者サムエルの霊性の流れを汲む者たちなのです。

●彼のプロフィールを四つの福音書から拾ってみると、以下のようになります。

①マタイ 27 章 57 節・・・金持ちで、イエシュアの弟子になっていた。

②マルコ 15 章 43 節・・・有力な議員で、自らも神の国を待ち望んでいた。

③ルカ 23 章 50 節・・・議員の一人で、善良で、正しい人であった。

51 節・・・彼はアリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいた彼は議員たちの計画や行動には同意していなかった。

④ヨハネ 19 章 38 節・・・イエシュアの弟子であったが、ユダヤ人を恐れてそのことを隠していた。

●上記の情報から明確に分かることは、アリマタヤのヨセフが最高法院の有力な議員であったが、イエシュアこそメシアであることを信じてイエシュアの弟子となった人であったということです。つまり、彼がイエシュアのために選ばれた人であったということです。彼がもしお金持ちでなかったとしたら、自分のために作っておいた新しい墓をイエシュアに提供することはできなかつたはずで、使徒パウロは「神は知恵ある者や強い者ではなく、かきめつるために、この世の愚かな者や弱い者を選ばれた」としながらも、主にある知者や身分の高い者たちも少なからずいることを述べています( Iコリント 1:26~27)。アリマタヤのヨセフはそのような身分の高い者の一人であり、イエシュアがメシアであることをあかしする者であったということです。

●アリマタヤのヨセフが「金持ち」であったことは、かつて取税人であったマタイだけが記す特記事項です。このことによって、イエシュアはユダヤの王としてそれにふさわしく、丁重に葬られることになりました。イエシュアは誰も使ったことのない新しい墓に納められたのです。「新しい墓」の「新しい」(「ハーダーシュ」**חֲדָשׁ**)ということばは、聖書においては**王に対して使われている語彙**なのです(出 1:8)。「新しい王」「新しい歌」「新しいいのち」「新しい契約」「新しい創造」「新しい生ける道」などすべて、王なるメシアと関係する語彙なのです。また、ヨセフはイエシュアの遺体を「きれいな亜麻布に包み」とありますが、「きれいな」と訳された語彙も、神にふさわしい「汚れのない、純粋な、真新しい」ものでした。

●さらにイエシュアイェシュアの受難と死を契機として、アリマタヤのヨセフは自分がイエシュアの弟子であることを公に示す機会ともなりました。それまでの彼はユダヤ人を恐れて、自分がイエシュアの弟子であることを隠していたのですが、イエシュアのからだの下げ渡しを願い出たことで、イエシュアの弟子であることを公にしたのです。そのことによって、同じく最高法院の議員であり、律法の教師でもあったニコデモが、信仰を同じくする仲間としてイエシュアの葬りに携わっています。最高議員の中でイエシュアを神の子として信じた弟子たちは、わずか二人です。数としてはわずかですが、たとえ二人であったとしてもそこに神が共におられるというあかしが成り立っているのです。ちなみに、「ヨセフ」(「ヨーセフ」יֵשׁוּעַ)の名前の意味は「加える」という意味です。創世記 48 章にはヨセフの二人の息子である「マナセ」と「エフライム」がヤコブの孫であるにもかかわらず、ヤコブの息子として受け入れられ、やがてカナンでそれぞれの相続地が与えられることを保証されます。同様に、最高法院のヨセフとニコデモは、やがてイエシュアを殺したイスラエルが神の相続を得られる保証ともなっているのです。このように、森の生態系がすべて一つにつながっているのと同様に、聖書が記す一つ一つのすべてがつながっているのです。

#### 4. イエシュアの葬りに付き添っていたマリアという名の女性たち

●マタイでは、61 節に「**マグダラのマリアともう一人のマリアはそこにて、墓の方を向いて座っていた**」と記しています。マグダラのマリアはどの福音書にも共通して登場していますが、マタイの場合には二人のマリアです。これはマタイの「証人である」ことの特徴です。四つの福音書を総合するとイエシュアの葬りを見ていた女性はマグダラのマリア、クロパの妻マリア、イエシュアの母マリアとその妹サロメの 4 人なのです。ちなみに、イエシュアがエルサレムに来たときに必ず訪れていたベタニアの村の「マルタとマリア」の姿はここには見られません。なぜならマリアはすでにイエシュアの葬りを予感し、香油を塗っていたからです。

●マリアという名前に隠された意味は、その初出箇所にあります。

【新改訳 2017】出エジプト記 15 章 20~21 節

20 そのとき、アロンの姉、女預言者ミリアムがタンバリンを手に取ると、女たちもみなタンバリンを持ち、踊りながら彼女について出て来た。

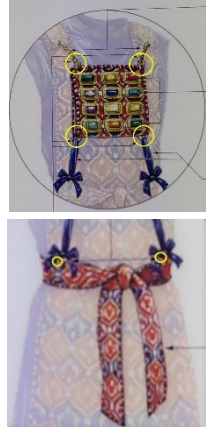
21 ミリアムは人々に応えて歌った。「【主】に向かって歌え。主はご威光を極みまで現され、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた。」

●ミリアムはアロンとモーセの姉で女預言者です。タンバリンを打ち鳴らしながら、賛美をもって預言しています。「主はご威光を極みまで現され、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた。」と。これはイスラエルの民を滅ぼそうとして追跡してきたエジプトの軍勢、すなわち神に敵対する者をさばくことで、神が神の民を救われることを意味しています。このミリアム(=マリア)がヨセフの名と一つになることを通してはじめて意味を持つこととなります。それはどういうことかと言えば、**主がイスラエルの民を救うのはイエシュアを通してである**というメッセージが隠されているということです。そのためには、イエシュアを葬るためにアリマタヤの**ヨセフ**が登場しなければならないという神の必然性があるのです。この二人の名前が揃うところに意味があるからです。

## מתי

● イエシュアは受肉する際にも母マリアと父ヨセフがおり、公生涯を終える時にもやはりマリアとヨセフという名を持つ人物が登場しているのは決して偶然のことではなく、神のシナリオでは必然なのです。その必然はイエシュアが葬られる墓の前で、「マグダラのマリアともう一人のマリアはそこにいて、墓の方を向いて座っていた」という記述に表されています。ここで二人のマリアが登場しているのは、マタイの場合は律法の規定に従って、「証言者は二人」という神の定めに従っているからです。

● その二人のマリアが「墓の方を向いて座っていた」のです。「～を向いて」と訳されている語彙はヘブル語の「ミンムール」(מִנְמוּר)です。それは、大祭司がエポデをつける際に**二個の純金の環**を用いて、肩当てと帯のそれぞれの継ぎ目を**向かい合わせる**ように付けるというところに使われています(出 28:27)。しかしここではマリアと墓、つまり**マリアと墓を提供したヨセフとが向かい合っている**のです。旧約のヨセフの生涯は「苦難と栄光」です。それは御子イエシュアの生涯の型そのものです。マリアとヨセフという二つの名前が「ミンムール」(מִנְמוּר)されることで、つまり向き合うことで、**イスラエルの民の救いはイエシュアを通してである**ということが啓示されているのです。



### 5. 封印されたイエシュアの墓

【新改訳 2017】マタイの福音書 27 章 62～66 節

- 62 明るる日、すなわち、備え日の翌日、祭司長たちとパリサイ人たちはピラトのところに集まって、
- 63 こう言った。「閣下。人を惑わすあの男がまだ生きていたとき、『わたしは三日後によみがえる』と言っていたのを、私たちは思い出しました。
- 64 ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと弟子たちが来て、彼を盗み出し、『死人の中からよみがえった』と民に言うかもしれません。そうなると、この惑わしのほうが、前の惑わしよりもひどいものになります。」
- 65 ピラトは彼らに言った。「番兵を出してやろう。行って、できるだけしっかりと番をするがよい。」
- 66 そこで彼らは行って番兵たちとともに石に封印をし、墓の番をした。

#### (1) 封印されたイエシュアの墓

● イエシュアが墓に納められたときはもう夕暮れで、その夜から始まる安息日のために、いわば葬りの応急処置をしたにすぎませんでした(下の写真の左側)。ですから、彼らは後できちんとした葬りをするために墓の入り口に大きな石を転がして帰ったのでした(マタイ 27:60、マルコ 15:46)。ところが祭司長と律法学者たちは、イエシュアが「わたしは三日の後によみがえる」と言ったことを思い出し、ピラトのところに集まり、イエシュアの遺体が盗まれて死からよみがえられたと吹聴されないように、三日間、兵士たちが墓の警備に当たるように嘆願しました。なぜなら、ユダヤ人は安息日を守らなければならないために墓の番をすることができなかったからです。交渉の結果、総督のピラトは番兵を出すことを許可しました。祭司長とパリサイ人たちは墓まで行って石が封印されたことを見届けています(写真の真ん中と右側)。封印されたということは、ピラトの許可なく、だれも墓の石を動かすことができないことを意味しています。墓はしっかりと封印され、墓は警備されることになったのです(マ

## מתן

タイ 27:62～66)。ここにイエシュアに対する彼らの執拗な敵愾心のすさまじさを見ます。



### (2) アリマタヤのヨセフの墓が提供されたことの意味

●ヨセフがもし自らの墓を提供することがなければ、イエシュアを公に葬ったことを証することはできませんでした。これはイエシュアの復活の事実を明確にするためにとても重要なことであったのです。アリマタヤのヨセフがイエシュアを墓に入れたことで、イエシュアが葬られたことをユダヤ当局が確認したことを意味します。このことはイエシュアの復活がより明確にされる結果となるのです。

### (3) イエシュアがダビデの町に葬られたことは、ダビデ王の子孫であることのあかし

●ユダの王にとって「エルサレム」(ダビデの町)に葬られることは重要なことでした。

①【新改訳 2017】 I 列王記 2 章 10 節

こうして、**ダビデ**は先祖とともに眠りにつき、ダビデの町に葬られた。

②【新改訳 2017】 I 列王記 11 章 43 節

**ソロモン**は彼の先祖とともに眠りにつき、父ダビデの町に葬られた。

③【新改訳 2017】 I 列王記 14 章 31 節

**レハブアム**は先祖とともに眠りにつき、先祖とともにダビデの町に葬られた。

④【新改訳 2017】 I 列王記 15 章 24 節

**アサ**は先祖とともに眠りにつき、先祖とともに父ダビデの町に葬られた。・ ・

●このように、ダビデの町(エルサレム)に葬られたユダの王たちの名前は他にも、**ヨシャパテ**、**ヨラム**、**ヨタム**、**ヒゼキヤ**、**ヨシヤ**がいます。これらの王たちはすべて善王と呼ばれる王たちです。イエシュアをダビデの町に葬ることは、「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」(IIサムエル 7:12～13)とするダビデに対する神の約束(ダビデ契約)を成就するために、とても重要なことであったのです。神のご計画は揺り動かされることなく成就することを、聖書そのものが証しているのです。

2022.3.6